

Ⅱ 東京府における教員養成の展開

1 東京府の各師範学校の校地・施設の変遷と特徴

現在、東京学芸大学および附属学校園は、大学キャンパスがある東京都小金井市をはじめとして都内五か所（小金井、世田谷、竹早、大泉、東久留米）に校地を有している。

表Ⅱ-1は東京学芸大学関係校地一覧で、図Ⅱ-1の①～⑫の番号は、表に対応している。本章では、師範学校が官立化されるまでの時期を中心に、東京府における師範学校の展開について、各校の校名・校地の変遷や特徴について見ていく。

東京府青山師範学校

東京学芸大学の前身校の一つである東京府青山師範学校（以下、青山師範学校）は、戦前の師範学校の制度やその時々々の社会、教育・教員養成の状況により、学校名の変更や校地の変遷を繰り返した。学校名の変遷でたどれば、東京府小学教則講習所（一八七三年）―東京府小学師範学校（一八七六年三月）―東京府師範学校（一八七六年一月）―東京府尋常師範学校（一八八七年）―東京府師範学校（一八九八年）―東京府青山師範学校（一九〇八年）―東京第一師範学校男子部（一九四三年）となる。学校名の変更に加え、校地の移転や校舎等施設の建設も行われてきた。

【麹町区内幸町時代】一八七三―一八八九年（表Ⅱ-1①）

東京学芸大学の始まりは、一八七三（明治六）年に設置された東京府小学教則講習所である。開設当初は、麹町区内幸町（現・千代田区内幸町）の東京府庁構内におかれた。ここに校地がおかれたのは一八八九年までで、その間に東京府小学師範学校（一八七六年三月―一八七六年一月）、東京府師範学校（一八七六年一月―一八八七年一月）、東京府尋常師範学校（一八八七年一月―一八九八年三月）と校名が変更された。この時期の校名の変更は、師範学校に関する諸制度（法令）の変更に伴い実施されたものである。なお、一八七六年九月に東京府小学師範学校に附属小学校が設置され、以後師範学校の名称変更に合わせて、附属小学校の名称も変更されていく。

表Ⅱ-1 東京学芸大学関係校地一覧

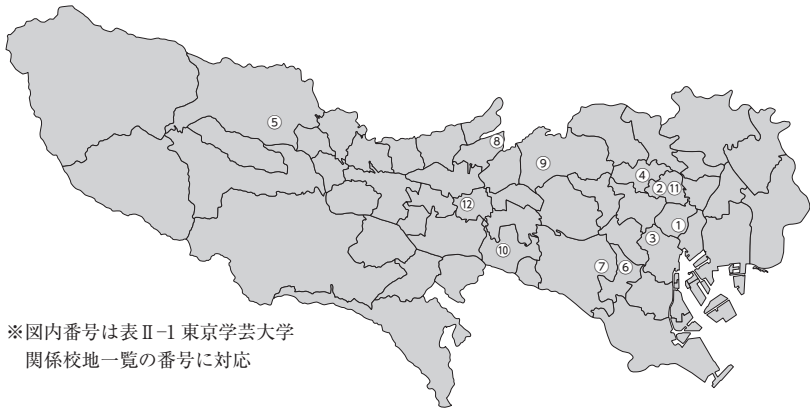
	校地	本学前身校	その後	現在	備考
①	千代田区内幸町	東京府小学教則講習所 (1873～1876) 東京府小学師範学校 (1876) 東京府師範学校 (1876～1887) 東京府尋常師範学校 (1887～1889)	竹早へ移転 (1889)	第一ホテル東京 日比谷ダイヤビル	東京府庁内に設置。前身は郡山藩柳澤家江戸屋敷(上屋敷)
②	文京区小石川 (竹早地区)	東京府尋常師範学校 (1889～1898) 東京府師範学校 (1898～1908) 東京府女子師範学校 (1900～1943) 東京第一師範学校女子部 (1943～1949)	竹早分校 (1949～1955)	附属幼稚園竹早園舎、附属竹早小学校、附属竹早中学校、都立竹早高等学校	
③	港区北青山	東京府師範学校 (1900～1908) 東京府青山師範学校 (1908～) 東京府立青年学校教員養成所 (1939～1940)	世田谷へ移転 (1936) 調布へ移転 (1940)	都営北青山三丁目アパート	
④	豊島区池袋	東京府豊島師範学校 (1908～1943) 東京第二師範学校 (1943～1944) 東京第二師範学校男子部 (1944～1946)	小金井へ移転 (1946) ※附属小学校は1957年まで池袋教室併置	池袋西口公園	
⑤	青梅市勝沼	東京府立農業教員養成所 (1920～1935) 東京府立青年学校教員養成所 (1935～1937)	駒場へ移転 (1937)	東京都立青梅総合高等学校	東京府立農林学校に附設
⑥	目黒区駒場	東京府立青年学校教員養成所 (1937～1939)	青山へ移転 (1939)	目黒区駒場野公園	東京農業教育専門学校に附設
⑦	世田谷区下馬／深沢 (世田谷地区)	東京府青山師範学校 (1936～1943) 東京第一師範学校男子部 (1943～1949)	世田谷分校 (1949～1964)	附属高等学校(下馬)、附属世田谷小学校、附属世田谷中学校(深沢)	
⑧	東久留米市氷川台 (東久留米地区)	東京府豊島師範学校・成美荘 (1936～)		附属特別支援学校、国際学生宿舎、成美教育文化会館	
⑨	練馬区東大泉 (大泉地区)	東京府大泉師範学校 (1938～1943) 東京第三師範学校 (1943～1949)	大泉分校 (1949～1955)	附属大泉小学校、附属国際中等教育学校、大泉寮	
⑩	調布市調布ヶ丘	東京府立青年学校教員養成所 (1940～1943) 東京都立青年学校教員養成所 (1943～1944) 東京青年師範学校 (1944～1949)	調布分教場 (1949～1951)	電気通信大学	
⑪	文京区向丘	東京第二師範学校女子部 (1944～1949)	追分分校 (1949～1953)	文京区立第六中学校	
⑫	小金井市貫井北町 (小金井地区)	東京第二師範学校男子部 (1946～1949)	小金井分校 (1949～1964)	東京学芸大学、附属幼稚園小金井校舎、附属小金井小学校、附属小金井中学校	前身は陸軍技術研究所

【小石川区竹早時代】一八八九～一九〇〇年（表Ⅱ-1②）

一八八六年四月一〇日、文部大臣森有礼の発案により「師範学校令」が発令された。この法令により、一八八七年一月に東京府師範学校は東京府尋常師範学校と改称した。この法令では師範学校において、小学校教員として必要な知識・技術の習得とともに、教師としての人格の陶冶を重視し、「順良・信愛・威重」の氣質を身につけさせることが目的であると規定した。また兵式体操や軍隊式の寄宿舎生活などが導入され、これらはその後の師範教育の方針を基礎づけるものであった。東京府尋常師範学校は、この「師範学校令」に伴う施設・設備の拡充および東京府庁の移転により、一八八九年に小石川区竹早町（現・文京区小石川）に移転し、校舎・設備を新築した。この竹早の敷地面積は約四千坪で、一〇〇人程度の生徒を収容することが想定されており、校舎は約九一三坪、西洋型木造二階建て（一部平屋建て）で建設された。また西洋型木造二階建ての寄宿舎と附属小学校も併設して建設された。当時としてはきわめて新しい様式の校舎であった。

一八九三年、神奈川県に属していた西多摩、北多摩、南多摩の三郡が東京府に編入されると、農業が盛んな地域に就職する者が増えることを見越し、一八九五年四月に選択制の農業科を設置した。

一八九八年一月に、尋常師範学校の校友会（部活動等課外活動の上部組織）である「尚武会」が発足した。この尚武会は、身体を強健にして士気を養うことを目的とし、当時あった四つの部活動が組織化された（柔術、剣術、庭球、器械体操）。その後一九一〇年代には、野球、端艇、蹴球を加え、七部となった。一九二〇年には「校友会」と改称し、心身の鍛錬に加え、会員相互の交流を図ることも目的に加えられた。それまでは運動系の部活動のみで構成されていたが、学芸部をはじめ、図書部、音楽部、弁論



※図内番号は表Ⅱ-1 東京学芸大学
関係校地一覧の番号に対応

図Ⅱ-1 東京学芸大学関係校地分布図

部などの文化系の部活動も含まれることとなった。また、部活動のほかに、運動会、遠足、水泳大会、学芸会等の立案・運営や機関誌『校友』の発行も行われた。

一八九七年一〇月九日に「師範教育令」が公布され、翌一八九八年に尋常師範学校は東京府師範学校に改称した。また、この「師範教育令」における師範学校生徒の定員増加、そして師範学校拡充および男女により学校を別にするという方針に基づき、新たに東京府女子師範学校が設置されることとなった。当時、東京府師範学校は生徒数の増加および設備の拡充に伴い、竹早の校舎では手狭になっていた。そこで新たな校地を求め、赤坂区青山北町に約一万二千坪の敷地を得て、新校舎を建設し（一九〇〇年落成）、移転後の竹早校舎には新たに開校する東京府女子師範学校が設置された。

【赤坂区青山北町時代】一九〇〇～一九三六年（表Ⅱ-1③）
東京府師範学校が青山北町に移転して七年後の一九〇七年四月一七日、「師範学校規程」が公布された（第Ⅰ章参照）。

これは、義務教育年限が四年から六年に延長されたことに伴い、師範学校を拡張・拡充すべく出されたものである。具体的には、本科を第一部（修業年限四年）および第二部（修業年限一年もしくは一部二年）とし、現職教員のための講習科を設置し、学科課程を全面的に改訂した。本科第一部を教員養成の中心に据えつつ、教員の供給不足を本科第二部の速成養成課程で補い、現職教員の学力資質向上のために講習科を置くという構造であった。東京府師範学校もこれに従い、学科を再編した。

一九〇八年、義務教育年限延長および都市化に伴う人口増加により教員の需要が増したことから、北豊島郡巢鴨村（現・豊島区池袋）に新たな師範学校として、東京府豊島師範学校が設置された。この豊島師範学校開校に伴い、東京府師範学校は東京府青山師範学校と改称した。一九〇七年の「師範学校規程」において、選択科目として農業もしくは商業の設置が規定されたが、青山師範学校では商業科を、豊島師範学校では農業科をそれぞれ置いた。

一九一八年、青山師範学校附属の商業補習学校が設置された。この商業補習学校設置の経緯等について詳細は不明であるが、「商業補習学校学則」（一九二四年三月発布）によると、その目的は、「現ニ商業ニ従事スル者又ハ従事セントスル者ノタメニ夜間又ハ便宜ノ時ニ於テ商業上必要ナル智識技能ヲ授クルト共ニ国民生活ニ必須ナル教育ヲ為スヲ以テ目的」とするもの



写真Ⅱ-1 青山師範学校・正門（1934年）

で、定員は二〇〇人、修身や国語、数学などの科目のほか、商業、簿記、商業実践、タイプライティングなどが教えられていた。

一九二五年の師範学校規程改正により、本科第一部の年限が一年延長されて五年になり、一九二六年には本科卒業生を一年修学させるための専攻科が設置された。一九二五年、「陸軍現役将校学校配属令」が施行され、官公立の中等学校以上の学校に、原則として陸軍現役将校が配置され、学校教練の指導にあたることとなり、師範学校における軍事教練が開始された。『師範教育百二十年のあゆみ』（一九九〇）によると「これは第一次世界大戦後の軍備縮小の情勢の中で、現役将校の失業対策も兼ねて、青少年に軍事思想を注入し、かつ国民軍の幹部の養成を考慮したものであった。

一九三一年、師範学校規程がさらに改定され、本科第二部の修業年限が二年に延長された。これにより第二部の在籍生徒数が二倍になり、これまで本科第一部の補完的な位置づけおよび教員の速成養成的位置づけだった第二部が、第一部と同等のものとなっていった。

【世田谷区下馬時代】一九三六～一九四九年（表Ⅱ-17）

一九三〇年代に入ると、生徒数の漸次増加により北青山の校地・校舎では手狭になったことと、木造校舎の老朽化により、新たな校地を求め校舎を新築することとなった。複数候補地の中から世田谷区下馬が選ばれ、一九三四年から校舎建設が始まり、一九三六年に移転した。敷地面積は約二万坪、新校舎は鉄筋コンクリート造三階建て（一部四階地下室付）で、現在も東京学芸大学附属高等学校にて一部建物が使用されている。また、木造二階建て（一部鉄筋コンクリート造）の寄宿舎と鉄筋コンクリート造三階

建ての附属小学校校舎も造られた。

移転先の最寄り駅であった東京横浜電鉄（現・東急電鉄）東横線の碑文谷駅は、青山師範学校の移転に伴い、駅名を「青山師範駅」に改称した。その後、一九四三年四月に東京府青山師範学校が東京第一師範学校男子部に改称するため、同年二月一日に駅名も「第一師範駅」となった。戦後、東京第一師範学校、東京第二師範学校、東京第三師範学校、東京青年師範学校が統合し、一九四九年に東京学芸大学が成立し、東京第一師範学校男子部があった世田谷区下馬は、東京学芸大学世田谷分校となったことから、一九五二年七月一日に駅名が「学芸大学駅」と変更され、現在に至っている。

一九三〇年代後半になると、戦時体制の強化と戦局の拡大により、社会的にも戦時色が濃くなっていく。青山師範学校でも新たに「本校教育精神」や「生徒十訓」などが制定され、教育方針の軍国主義化が鮮明になっていった。靖国神社例大祭参拝や軍事講習等はそれまでも行われていたが、この時期になると陸海軍関係者による時局に関する講習や防空演習等が頻繁に行われるようになり、遠足や耐久走、寒稽古、武道大会など身体の鍛錬も盛んになっていく。また、それまでは学校内外の清掃を主とした勤労作業が行われていたが、一九四〇年代になると戦時下の食糧事情の悪化および労働力不足を補うべく、食糧増産のための農地開拓



写真Ⅱ-2 青山師範学校・世田谷新校舎（1937年）

と軍需産業への勤労働員が行われるようになった。一九四一年八月、文部省より「学校報国団体制確立方」(訓令第二七号)が示され、青山師範学校報国隊が結成され、校友会をはじめとする生徒の活動は報国隊のもとに統合、再編成され、組織的に軍事動員されていくこととなる。

東京府女子師範学校

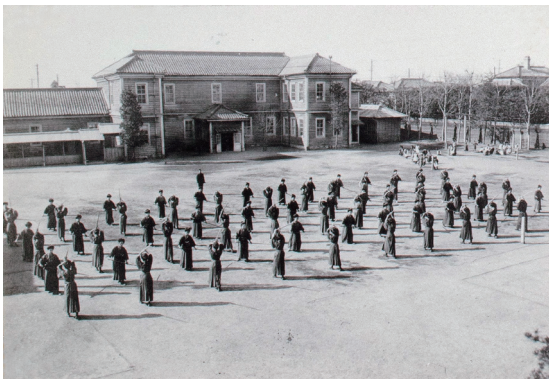
東京府における独立した女子師範学校である東京府女子師範学校(以下、女子師範学校)が開校したのは、一九〇〇(明治三三)年のことである。この女子師範学校は、前述のとおり、一八九七年の「師範教育令」公布による師範学校拡充および男女別の師範学校設置の方針に基づき、東京市小石川区竹早に、東京府師範学校の校地・校舎を引き継いで開校された(表Ⅱ-1②)。一九〇〇年当時、全国において、独立した女子師範学校は東京府女子師範学校のほかに、大阪府女子師範学校、新潟県女子師範学校のみで、最も早い設立校の一つであった。また、それまでの東京府師範学校附属小学校の在籍児童・校舎・校具等すべてを移管する形で東京府女子師範学校附属小学校が設置された(現在の東京学芸大学附属竹早小学校)。そして、女子師範学校の設立と同時に、東京府第二高等女学校が併置された。第二高等女学校には本科のほかにも補習科もおかれ、教員志望の卒業者に補習教育が行われていた。教員は女子師範学校と第二高等女学校両校の兼任であった。一年目は第一および第二学年各一学級ずつ募集し、第二学年に入学を許可されたのは、府立第一高等女学校在学中の小学校教員志望者であった。女子師範学校の開校当初の授業科目は、修身・教育・国語・漢文・歴史・地理・数学・理科・家事・習字・図画・音楽・

体操の一三科目で、修業年限は三年であった。一九〇二年に二階建て校舎を一棟新築し、作法教室、裁縫教室にあてた。一九〇四年には、附属小学校の二階建て校舎が新築され、この校舎の中にこの年新たに設置された附属幼稚園（現在の東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎）が収容された。

一九〇七年の「師範学校規程」の制定に基づき、一九〇八年二月には学則が改正された。本科第一部は入学資格を高等小学校卒業者とし、修業年限を四年（修業年限一年の予備科も設置）、第二部（一九一一年設置）は、入学資格を高等女学校卒業者とし、修業年限を一年もしくは二年とした。このことにより第一部では修業年限が延長され、新たに第二部が設置されることにより、女子の教員養成の体制が形づくられた。この修業年限であるが、一九二五年の「師範学校規程」の改正を受けて、予備科が廃止となり本科第一部の年限を五年に、一九三一年の改正により、本科第二部の年限が二年にそれぞれ変更された。なお、一九〇八年時点の女子の卒業者の服務年限は第一部公費生が五年、第一部私費生が三年、第二部生は二年であった。

一九一〇年は創立一〇周年にあたり、「東京府女子師範学校校友会」が結成され、『会誌』も発刊された。また女子師範学校同窓会の『会報』も同年第一号を発刊した。

女子師範学校では、通常の授業のほか、観桜会、遠足、学芸会、運動会、修養会など、さまざまな行事が行われていた。一九一五



写真Ⅱ-3 女子師範学校・体育の授業（1917年）

年五月からは、三年次に日光、四年次に関西へとそれぞれ修学旅行も行われるようになり、生徒自身の手で旅のしおりや修学旅行の報告記が作成された。校友会のもと、部活動も盛んに行われ、陸上競技や籠球部などが強かったようである。一九二二年に学制発布五〇周年記念事業で運動場が完成し、より運動が盛んになった。当時、運動会には親族といえども成人男性の学内への入場は厳格に禁止され、若い男性教員は入場者の警戒にあたったという。

一九三〇年代には、老朽化していた校舎の建て替えが行われることとなった。それまで木造だった校舎は、一九三二年から五か年計画で建て替えが行われ、鉄筋三階建ての新校舎となった。同時期に体育館や寄宿舎などの改築も行われた。女子師範学校の生徒の服装は服装規定により定められていたが、このころ和装(袴・靴履き)から、洋装(セーラー服)へと変わった。

一九三〇年代後半になると、女子師範学校の教育も年々戦時色が強くなる。体操の時間には軍事訓練が行われ、慰問袋の献納や軍需品の作成なども行われた。一九三四年以降の第一部四年次の修学旅行では関西を経て朝鮮へ、一九三九年には第一部・二部ともに満州へと、植民地や占領地へも渡航するようになった。一九四一年以降、戦況の悪化と治安維持の観点から、修学旅行の行き先は関西となった。

一九四一年には、東京府女子師範学校校友会を解散し、竹早報国団および竹早報国隊が結成された。この竹早報国団・竹早報国隊は、「学校教育全般を通じて修練教科の博大なる推進力たるべき真の修練組織」であり、報国団のもとに各隊組織を編成し、「国家に対する時局的積極性を發揮して十分なる奉仕活動を実践遂行する」体制がつけられた(『東京学芸大学二十年史』一九七〇)。この報国団の中には炊出隊や看護隊、保育隊なども設置され、その後組織的に勤労働員されることとなる。

東京府豊島師範学校

一九〇七（明治四〇）年の小学校令改正により、義務教育年限が四年から二年延長されて六年になった。都市化に伴う東京府の人口増加と義務教育年限延長による教員養成の急務への対応のため、東京府は新たに師範学校を一校増設することとなり、一九〇八年二月、北豊島郡巢鴨村（現・豊島区池袋、池袋西口公園あたり）に東京府豊島師範学校（以下、豊島師範学校）が新設された（表Ⅱ-1④）。現在でこそ東京の副都心の一つとして大変栄えている池袋だが、当時は周囲に家はなく一面の野菜畑の中にポツンと豊島師範学校の校舎が建っているという状況であった。

開校当時、生徒の募集および選抜試験は、青山師範学校と合同で行い、奇数の合格番号の者は青山師範学校、偶数の者は豊島師範学校に入学しており、一九二〇年に単独募集となるまで、この方式は続いた。一九〇九年四月の第一回入学生は、本科第一部三九人、予備科七七人で、そのうち東京府出身者は全体の一割程度でそのほかは他県出身者（千葉、茨城など近県者が中心）であった。開校当初の豊島師範学校は、若い教員が多く、当時の気風について、「従来とかくの批難のあつた所謂師範タイプを打破し、自由にして剛健、どことなく余裕があつて、しかも正大の氣に富み、創造的活動的である校風を樹立せんとする清新な雰囲気は漲つて」いたという（『東京学芸大学二十年史』一九七〇）。また、初代校長の大東重善は男子中等学校にも女性教員が必要であると考え、英語教師の北村美那を採用した。中学校や当時師範学校をはじめとする男子中等学校に女性教員はほとんどいなかったこの時期としては珍しく、男子中等学校の女性教員採用の嚆矢となった。

なお、校舎は一九〇九年二月に建築着工し、同年中には附属小学校校舎落成、一九一一年には校舎建築が完了したが、翌一九一二年三月に火災があり、本館と校舎左翼部分を残して、大半を焼失した。その後復旧工事が行われ、一九一三年に木造二階建て（一部平屋建て）の校舎、寄宿舎、附属小学校が再建された。敷地面積は約一万五千坪で、校舎等建物のほかに農業実習地が含まれている。

一九一〇年に豊島師範学校に農業科が設置されたが、これに伴い北多摩郡松沢村に農業実習地をもち、生徒たちが開墾を行った。一九一八年三月、豊島師範学校の附属として北多摩郡千歳村烏山小学校内に東京府豊島師範学校附属農業補習学校が設置された。実業補習学校は、尋常小学校卒業後の勤労青少年に対し、実業・職業に関する知識・技能を授けることを目的とする学校である。豊島師範学校に設置された農業補習学校の詳細については記録がなくわからないが、農業科の設置に続き、農業教育、農業実習に力を入れていたことがわかる。

一九三二年七月、成田千里が豊島師範学校五代目校長に就任すると、豊島師範学校の大改革を行った。これは、いわゆる当時批判の対象となっていた「因循姑息な師範生型」（「不活発」、「無主義屈従」、「元氣阻喪」といった言葉で表される師範学校生徒）を改めることを目的としたもので、一九三五年に『我が校の新教育』を発表し、学校綱領から、寮生活、学校生活等の具体的な方針が示された。特徴的な改革の内容としては、学寮改革、学外施設の設置・運営がある。学寮改革の特徴としては、全寮制の実施（通学生の廃止）、予科生と本科生とに分け寮と組織を区別、教育実習生用の寮および教員・生徒らが集う新たな集会場の新設、学生総務室の設置と学生自治制の開始などであった。全寮制とすることで、生徒の生活全体を組織化しつつ、風通しのよい場とすべく教員や生徒同士が集う場を設け、生徒たちが自分

たちの生活を統制するための自治制を敷くものであった。

この時期に三つの新たな学外施設が設置された。一つは至楽荘（一九三四年、千葉県夷隅郡興津町鵜原）という水泳等体育に関わる演習を行う臨海宿舍で、「海の道場」とよばれた。二つ目は成美荘（一九三六年、東京府北多摩郡東久留米村）で水田、畑、山林、養魚池を備えた農業の演習地で「田園の道場」、もう一つは一字荘（一九三九年、神奈川県足柄下郡箱根町駒が丘山麓）で登山を通じて心身の鍛錬を行う林間宿舍、「山の道場」である。いずれの施設も都心から離れた大自然を教場にして、豊島師範学校の生徒および附属小学校の児童の心身を鍛錬し、人格を陶冶するための施設であった。これら施設のうち、至楽荘と一字荘（一九六八年、長野県茅野市に移転）は、現在では公益財団法人豊島修練会が管理・運営を行っている。東京学芸大学附属小金井小学校では毎年三〜六年生が「至楽荘生活」とおよび「一字荘生活」という宿泊行事を行っている。また、成美荘があった場所は、現在東京学芸大学附属特別支援学校および成美教育文化会館（豊島修練会が管理・運営）となっている。



写真Ⅱ-4 豊島師範学校・成美荘全景

東京府大泉師範学校

東京府大泉師範学校は、府内四番目の師範学校として、一九三八（昭和一三）年四月東京市板橋区東大泉町（現・練馬区東大泉）に設置された（表Ⅱ-1⑨）。高等小学校卒業者を対象とした本科第一部をおかない、中学校卒業を入学要件とした本科第二部のみの学校であり、それは日本の師範学校の歴史上、初の試みであった。



写真Ⅱ-5 開校当初の大泉師範学校

敷地面積は約一万七千坪で、校舎・寄宿舎等が新築された。初代校長はのちに東京学芸大学初代学長になった木下一雄であった。初年度の志願者数は一道三府三六県から五五六人あり、入学者数は一六四人で倍率は約三・四倍だった。入学者は東京府出身者および関東近県が多かったが、遠方では岩手県や長崎県の出身者もいた。全寮制で、寮舎は一棟あり、各寮の収容生徒は一学級のみで各寮につき二名の教員がともに生活しつつ訓練・指導をするという形で、少人数制で教科教育だけではない日常生活の指導・教育が行われていた。

大泉師範学校の教育方針として、「実験実習並びに演習を重んずる」、「作業は本校教育に於ける特に重要な教育場面」とあり、座学による教科教育のみならず、課外活動や校外行事、勤労作業など

が重視されていた。特徴的な課外行事に「武教強行軍」とよばれた長距離行軍（学校から山梨県甲府まで一二〇kmを歩く、心身の修練を目的とする行事）や朝鮮・満州への修学旅行などがあった。戦時下においては、勤労作業、軍事演習参加、防空訓練なども行われるようになった。

一九三九年四月、大泉師範学校内に傷痍軍人東京小学校教員養成所がおかれ、傷痍軍人を対象とした尋常小学校本科正規教員の育成が行われることとなった。期間は一年間で中学校卒業者および同等以上の学力を有する者が対象で、初年度入所者は二四人、その内訳は中学校卒業一〇人、実業学校卒業二人ほか、年齢は二二～三五歳、平均二五歳であった。

2 各師範学校附属学校の機能と展開

各師範学校には、師範学校の教生（教育実習生）のための教育実習の場として、そして授業法の研究の場として、附属小学校および附属幼稚園がおかれていた。図Ⅱ-2は、戦前期東京府の師範学校附属学校の一覧である。各師範学校の設置とともに、附属小学校・幼稚園が附設され、校名や校地も師範学校とともに変遷しているのがわかる。東京府の師範学校で初めて附属小学校が創られたのは、一八七六年（明治九）年の東京府小学師範学校附属小学校で、これは現在の東京学芸大学附属世田谷小学校の前身校にあたる。一八七六年三月に出された附属小学生徒募集の達書たつしがきによると、創立当初の附属小学校では、満六～一〇歳までの男女児童を対象にまずは六〇人を募集し、同年九月にはさらに三〇人の募集を行っ

た。また一八七五年一月に東京府が文部省に提出した「附属小学通則」によると、教育趣旨は「教科書ヲ熟シ且行儀ヲ正スヲ主トス」で、教科書を重んじ行儀作法を学ぶことが教育目標に掲げられていた。師範学校附属小学校は通常の小学校とはその存在目的が異なっており、一八八三年の「附属小学校規則」第一条には、「附属小学校ハ師範生徒ヲシテ小学校授業ノ方法ヲ実地ニ練習セシメ兼テ府下小学校教員ニ授業ノ模範ヲ示ス所ナリ」と、また一九〇一年の「東京府師範学校附属小学校規則」には、附属小学校は小学校令第一条に拠り、児童を教育する場であり、師範学校の生徒の実地授業の練習の場でもあり、また小学校における教育方法に関する諸般の事項を研究するところと規定されており、実習校、研究校としての性格が明確に付与されていることがわかる。

実習校としての附属学校

師範学校附属小学校における教育実習は、時期によって実習期間の長短はあるものの、年間を通じて行われていた。一八八〇年代の東京府尋常師範学校附属小学校では、年間を六期に分けて約二か月間の実地授業を行っていた。また、一九二〇年代半ばの東京府女子師範学校附属小学校での教育実習は、最終学年時に一学期間およそ三か月にわたって行われた。豊島師範学校では、三か月の教育実習のほかに、豊島師範学校附属農業補習学校がおかれていた北多摩郡松沢村の松沢尋常高等小学校（一九二〇年、同郡千歳村烏山小学校より移転）において一週間の教育実習を行い、公立学校の実情を学んだ。

青山師範学校附属小学校では長年にわたって八週間の教育実習が行われてきたが、その具体的な

内容は以下のとおりである（以下、『師範教育百二十年のあゆみ』一九九〇）。教生は、一学級に二～三人配属され、担任指導は、修身と研究教科のみ授業を行い、ほかは教生に分担させた。第一週目は配属学級参観、第二週目からは授業を行い、他学年や他学級の授業参観も行う。第三週目から全学年参観、高等師範学校附属小学校参観、市内および郡部小学校の参観も加えられ、第七週には低中高等学校に分けた小研究授業、最終の第八週には教生全員参加の大研究授業および研究会が行われた。実習の初めの時点で分担教科からテーマを見つけて研究をまとめるよう課されており、その研究発表も行われた。また、職員室当番や応接室当番によって来客や電話対応、庶務の処理実習も行われており、まさに教員として必要な日常的な技術をも学ぶことができるようプログラムされていた。

戦前期における附属学校の特徴的な教育研究・実践

師範学校附属小学校では研究校として、どのような教育研究・実践が行われていたのか、ここでは青山師範学校附属小学校での特徴的な取り組みについて、いくつか取り上げる。



写真Ⅱ-6 女子師範学校・教生指導（1914年）

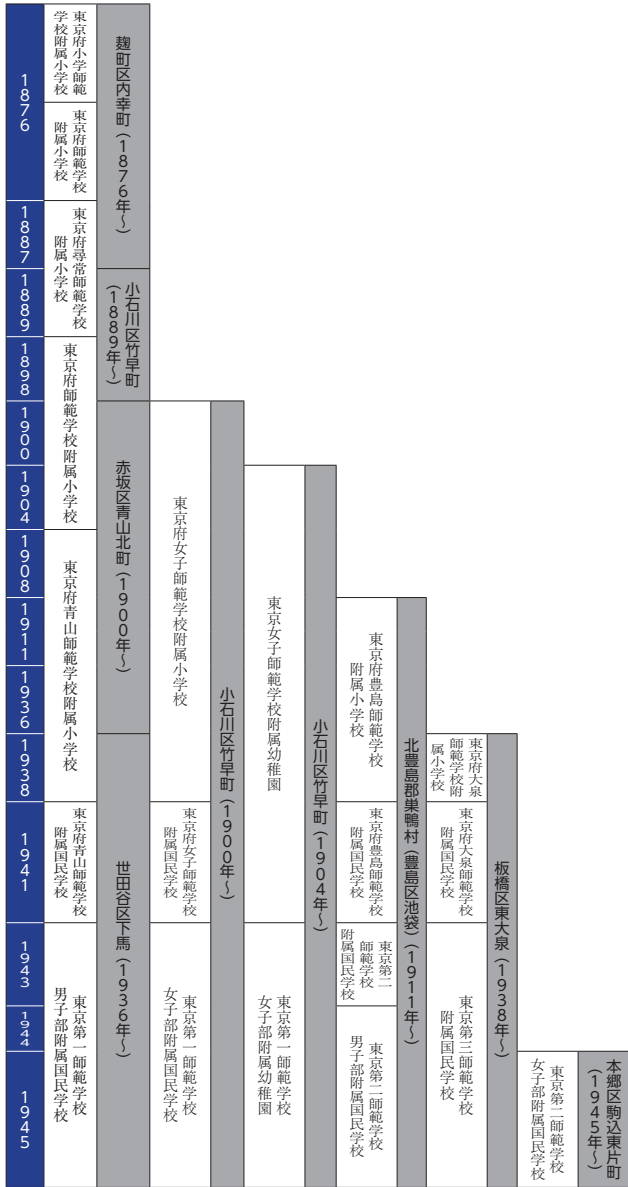


図 II-2 戦前期 師範学校附属学校 校名・校地変遷一覽

庶物指教の導入

学制發布当時、文部省による「小学教則」と師範学校（のちの東京高等師範学校、現・筑波大学）による「小学教則」とがあったが、そのわかりやすさや教科書等教材の多くが師範学校で編集されていたこと、また師範学校の卒業生が各府県教則の編成や教授法の指導にあたっていたことから、師範学校の「小学教則」に準拠した各府県の教則が作成され、「庶物指教」を用いたペスタロッチ主義の教育法が全国の小学校で行われていたという。創立初期の附属小学校でも、この師範学校の作成した「小学教則」に則って授業が行われていた。「庶物指教」とは、児童に身近な事物をよく観察、体験させ、その性質や用途などを教師―児童間で問答し、実感をもった理解へ導こうとするもので、小学校低学年の教授法として考案されたものであった。特に新教科であった「問答」においてはその教授法が明確になっておらず、附属小学校ではこの「庶物指教」を用いた「問答」の授業法の研究や教図の指導法の研究に着手した。「庶物指教」は単に「問答」一教科に閉じた教授法ではなく、読物や算術などの教科においても直観的に具体的に学ばせるといふ、各教科の授業法をつらぬく基本原理としてこの当時重用された。

直観科教授の研究

青山師範学校附属小学校では、一九一九（大正八）年から直観科の研究を始め、一九二一年四月に尋常科一～三学年に対し、直観科を設置した。直観科は、直観を通して充実した生活基盤を整えさせることを目的としており、一九二七年にまとめられた『直観科教授の研究』には、直観科の実際の授業細目がまとめられている。これによると、直観科は、児童の生活において密接な関係のある事物および現象

を直観に訴えて学習することによって、すべての精神作用のもととなる観察力を修練し、観察を通じて思考力や想像力を養い、観察や思考の結果を言語や図表等を使用し発表することによって発表の技能を練成することができる。そして、これら一連の作業を通じて得た思想は明確かつ豊富なものとなり、物象に対して親性の気持ちを育成することとなる。親性は物象に対して追求的に学習する態度を創り出すこととなり、すべての問題に対して自発的に研究する態度を涵養することになるという。この『直観科教授の研究』は、発刊後、多くの研究校の指針となった。

戦時下の鍛錬教育

一九三八（昭和一三）年一二月、国民学校案が答申され、従来の小学校令に変わることが確定的になったことを契機に、青山師範学校附属小学校では「皇国民錬成」をめざした国民学校研究が始まった。国民学校は、「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」（国民学校令）第一条、一九四一年公布）るもので、一九四〇年には『国民学校皇民錬成の研究』にまとめられた。

戦時体制下の青山師範学校附属小学校では、阪本一郎主事の心理学研究を基礎に「皇国の道」を説明する試みが行われた。それは、個人が行動の場に臨んだとき、「己をむなしくして場を生かすべきであり、場はまた、「己をむなしくして個人を生かすべきであるとするもので、自我を生かす「場」という考え方を無に帰するという意味の「座」に置き換えた「座の教育観」と称し、滅私奉公の人格適応論の提唱であった。この「座の教育観」を原理とした鍛錬教育の実践が組み立てられていくこととなる。

東京学芸大学 150 年の歩み 1873-2023 [電子版]

2023 年 6 月 30 日 第一版第一刷発行

編 者 国立大学法人 東京学芸大学

発行者 田中 千津子

〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-6-1

電話 03 (3715)1501 (代)

発行所 株式会社 学文社

FAX 03 (3715)2012

<https://www.gakubunsha.com>

©Tokyo Gakugei University 2023

無断転載・再配布を禁じます。

ISBN978-4-7620-3245-5